

## <大川小と門脇小> 悲しみの母校と向き合う

東日本大震災で被災した宮城県石巻市の大川、門脇両小学校舎の遺構保存をめぐり、市民を対象とした公聴会が13日、同市内であった。遺族や地元住民ら男女計21人が持論を展開。「震災の教訓を後世に伝えるため必要」「見るたびにつらくなる」などと複雑な感情が交錯した。

◎大川小 永沼悠斗さん（21）「風化させたくない」

多くの大切なものを失った震災から5年近くがたち、やっと一歩前へ進めた。

大学3年永沼悠斗さん（21）は大川小の公聴会に臨み、約70人を前に母校の保存を訴えた。「大川小を見て防災意識を高め、多くの命が救えるなら残した方がいい」

2011年3月11日。石巻市長面地区にあった自宅は津波で流され、大川小2年だった弟＝当時（8）＝を亡くした。永沼さんはしばらく、思い出が詰まった大川小を見ることも、足を運ぶこともできなかった。

小学校卒業後に通った旧大川中が震災の影響で13年3月に閉校となり、校舎は解体。愛着ある学びやが姿を消し、寂しさと悔しさが募った。

「震災を経験した者にとって風化させず、警鐘を鳴らし続けることは使命。せめて大川小だけでも残したい」。公聴会開催を知り、公の場で意見を述べる決意をした。

会場で解体を求める遺族らの切実な声にも耳を傾けた。「遺族のつらさはよく分かる。保存、解体どちらの意見も大事。どちらが多いから良いというわけでもない」

亀山紘市長は本年度内に保存の可否を判断する見通しだが、永沼さんは時期尚早と考える。「もっと話し合いの場を設け、広く、深く意見を聞いてから結論を出してほしい」と切望する。

◎門脇小 阿部桃花さん（17）「世代超え残したい」

母校の遺構保存をめぐる議論を聞き、震災時の在校児童として意見を言いたいと思いマイクを握った。

「門脇小を残してほしい」。石巻高2年の阿部桃花さん（17）は静かに話した。当時は6年生。地震の後、教師の引率で背後の日和山に登り、難を逃れた。

同校は、学校にいた児童約270人が日和山に避難して無事だった。訓練で地震が来たら高台に逃げろと教えられていたという。

自宅は被災を免れたが、津波やがれきに引火して炎が迫った。門脇、南浜両地区では400人以上が死亡・行方不明。友人の多くは家や家族を失った。

阿部さんは「悲惨な姿になった校舎は震災を伝えるシンボル。何世代も先に伝えていきたい」と訴えた。

校舎近くに住む宮城水産高教諭平居高志さん（53）は解体を主張し、防災教育の在り方に疑問を呈した。「過去の災害が伝えられていなかったと言うが、実際はたくさんあった。ただ、私たちに歴史に学ぶ姿勢がなかっただけ」と断じる。

それでは多大な費用を掛けて校舎を残しても、防災につながらない。平居さんは「校舎の保存よりも、過去に学ぶ心を教育していくことにエネルギーを費やすべきだ」と呼び掛けた。



大川小の公聴会で校舎の保存を求める永沼さん

拡大写真



門脇小学校舎の公聴会で意見を述べる阿部さん

拡大写真

石巻市の震災遺構の保存をめぐる公聴会の発言者要旨

大川小	賛成	男性	未来の子どもの命を守るために残すべきだ
	反対	女性	救えたはずの命があったことを伝え続けたい
	賛成	男性	解体し犠牲者の魂が帰って来られるよう整備を
門脇小	賛成	男性	公團化し、地元住民が安らぐ場にしてほしい
	反対	女性	震災を後世に伝えるために被災校舎が必要だ
	賛成	女性	母校で思い出がある。防災対策にもつながる
門脇小	賛成	男性	自然災害の被災建築物を残すことは疑問だ
	反対	男性	人が住む場所に廃墟を残さないでほしい

拡大写真